

わたしのらんちゅう飼育法

三 浦 東 吾

金魚の飼育を始めてからもう10数年にもなると思うが、あの頭に大きなコブをつけて、体の割合には小さい尾鰭をバツと開いてゆらりゆらりと泳ぐ、いわゆる「金魚の王様」といわれる「らんちゅう」にコリだしてからはまだ5年しかたっていない。しかも最初2カ年は4・50匹幼魚を買ってきても、ものの10日とたためうちに全滅である。やっと3年目になって1匹も殺さず、まずは人並みに「らんちゅう」を育てあげられるようになったのである。爾来、今日まで毎年品洋会では上位入賞して、いささか女房や子どもたちに対して面目を保ち、いまではだれからも文句を言われずにすむようになったわたしである。

そんなわたしが、ものずきな伊藤館長さんの「君のらんちゅう飼育の秘訣を書け」との御命令で、かくはペンをとる次第である。限られた紙数なので、その全部について詳述することはできないが、アマチュアの方々が一番知りたい点だけについて述べることにしたい。

1 殺さぬコツ

(1) 水温と水質

金魚を殺す原因は、たいてい水温と水質の急激な変化によるのである。それゆえ養魚池の水をとりかえるときは、井戸水にしても、上水道の水にしても、汲みだちの水は使わず、1日以上汲みおいたもので、水温は現在いる養魚池の水温と同温のものか、1度くらい高いものを用いる。決して低温のものは使用しないこと。「らんちゅう」はとりわけ急激な水温低下には弱いのである。それゆえ、わたしは雨や雪には絶対あてめようにし、また養魚池のコンクリートの側壁の厚さ、底の厚さも地温の変化が急激におよばぬように、4寸から5寸の厚さにしている。これは普通の池の側壁の2倍の厚さである。また直夏の日盛りは、水温の急上昇をさけるために覆いをして、30度以上には昇らぬようにしている。「らんちゅう」にとっての適温は25度前後で食欲も最も旺盛、したがって発育ぶりも最良である。

糞の掃除は毎朝すること。その際食い残した餌のあるときは、これも取り出して水質の変化を最少限度におさえること。水を全部取りかえるよりも、毎日4分の1くらいを糞の掃除のときに取りかえて、水かえの回数を少なくする方がよいように思われる。但し真夏は水質の変化が激しいから3日か4日に1度くらい全部取りかえる方がよい。冬は水かえをする必要はない。

(2) 金魚の数と池の大きさ

すし詰め学級は絶対に排除すること。でなければ酸素欠乏で死ぬことうけあいである。

わたしの養魚池は4尺と5尺5寸角で、深さは6寸(稚魚—幼魚)と8寸(親魚)の2種類である。この池に親魚ならせいぜい4、5匹、1寸くらいの幼魚なら30匹くらいである。水深は親魚で7寸5分、孵化した稚魚は3寸から始めて成長するに従って深くし、秋には5寸くらいの深さにする。養魚池の場所は南向きの日のよくあたるところで、北風のあたらないところを選んでいいる。

2 よい「らんちゅう」を育てるコツ

(1) 優秀な血統魚を選ぶこと

雌雄ともに優秀なことにこしたことはないが、二者択一という場合には雄の優秀なのがよい。女房族には言われないことだが、どうも雄の素質をより多く受けて生まれるようである。

(2) 産卵と孵化

4才魚(数元年)から5才魚の、しかも最初の産卵をとるのが卵も大きく、数も多いのでよい。孵化は水温を20度くらいにして1週間で生まれるようにすること。これより早いものは発育も悪く、品質も劣る。

(3) 選別の基準

孵化後2週間ぐらゐに第1回目の選別をする。尾ひれが左右ピンとよく開いているものだけを残して他は棄てる。3週間目に第2回目の選別をする。脊形が楕円形のもので腰から尾鰭への曲り方の角度の深いもの、また尾筒の太いものを残し他は棄てる。このようにして大体4、5千匹から200匹くらいまでにしぼり、さらに生後3カ月くらいまでに2、30匹くらいにしてしまうのである。品評会の10月ころまでにせいぜい2、3匹「これはいいなあ」と思われるものが残ればまず幸せと思うべきである。

(4) 形の美しさ

以上のような方針で選別していれば、大体外見上の形はまずよいものが残る。しかし成長するにつれて飼育の上手、下手で変化するから次のような事に注意しなければならない。稚魚から幼魚の時期に水深が深すぎるとどうしても水圧の抵抗を少なくしようとするため、脊形がまるくなりすぎ、また尾ひれがすぼんでくるので体長1寸くらいまでは、水深を3寸くらいにしておきそれ以後次第に深くし、冬越しをするときは7寸くらいまでの深さにするのがよいようである。

(5) 色の美しさ

色を鮮明にするためには水を浅くして、日光の透過率をよくすることと、クロレラを発生させて水をうす緑色にすることが大切である。しかしクロレラが発生しすぎ、また温度が上昇しすぎると酸素過剰になって急に水ぶくれができて、穴があいてくる(気泡病)。そこらのかげんに苦心がいろいろあるのである。

(6) 獅子頭を大きくする

頭のコブ(獅子)を大きくするには水深を深くすることと、栄養価の高い餌を与えることにつきる。しかし水深が深いと色は悪くなるし、これまたかげんがむづかしいのである。

大体以上のような請点に留意して飼育していけば、理論上ではよい「らんちゅう」に育て上げるはずである。しかし実際にはそれらの諸条件が衝突しあってなかなかうまくゆかぬものである。わたしは色を美しくするのは後まわしにして、体形と獅子頭に重点をおき、その2つが一応整ったら品評会の1カ月ほど前から水深を浅くし、クロレラを発生させて日光によく当てて色の染めあげをすることになっている。

とにかく要はその発育状況を自分のネライを考えあわせてそのつど手を替え、品を変えていくのである。少々欠点のある金魚でも他にすぐれた長所のあるものは、特にその長所を伸ばすように飼育の方法をその1点に押して、欠陥をカバーするだけのすぐれた長所にしあげている。
“平均下された美しさをねらうことも大切だが”アクセント美人をねらって育てあげるのも楽しみである。

3 餌の与え方

稚魚の間は、ミジンコを日中は絶えることなく与えるが、夕方には与えない。2カ月目くらいから赤ボウフラ(ゆすり蚊の幼虫)を与える。少量を回数多く与えることにしている。それは体にゼイ肉がつかぬように運動をよくさせるためには食欲を常に旺盛にしておく必要がある。それゆえ決して満腹感を味わわせぬように少量を回数多く与えて、常に餌を探して泳ぎまわるようにしむけるのである。与えすぎると腹だけが太りすぎて体形をこわすことになる。

腹の小さいものにはイトミミズを与えると大きくなる。イトミミズはそうした時にしか用いないことにしている。

以上いろいろ述べてきたが、わたしにとつては、「らんちゅう」を飼育することも、学校で学生たちを教育することも同じである。要はそれらのものが血統的に生まれるからに持っている資質というか素質というか、そうした内にある可能性をフルに引き出してやるためにはいかなる手をうちつづけるかということである。教育において児童生徒の発達段階に即応して、きめ細か

な教育技術がうちつけられてゆくように「らんちゅう」においても、毎日毎日その発育ぶりをにらんでそれに応ずる手を打つ以外にはこれという秘訣はないのである。いうなれば、いまではわたしにとつてともすれば荒っぽくなりがちな大学教育の中で、教育におけるキメの細かさを少しでも忘れないようにするためのものとして「らんちゅう」飼育は生活の中に位置づけられているのである。趣味というものはなんらかの意味で、それぞれの人々の生活の中にそれなりの位置づけができなければならないものではなからうか。

（福井大学助教授）